［ふるさと研究］

攀じ登った俳人
～杉田久女と英彦山と小倉鉄道～

筑豊北九州地域研究会（英彦山と久女調査班）
宮嶋玲子　糸瀬勝彦
末永裕貴　久門　守

はじめに
第一話　福聚寺の座禅石
第二話　椿咲く地蔵の森
第三話　鉄路で英彦山へ
第四話　麓からは乗合で
第五話　暴風雨に遭遇
第六話　攀じ登る女人
第七話　足袋・草鞋・山袴
第八話　理由なき除名
第九話　よみがえる久女
第十話　「心の山」と句会

はじめに

筑豊は石炭によって生まれ、北九州は筑豊によって生まれた。しばしば耳にする言葉だが、わが国を支えたその二つの地域の端から端までを幾度となく行き来した俳人がいた。性別にこだわらない現代の俳句への道を切り開いた杉田久女（一八九〇―一九四六年）である。小倉で日々を送った久女が強く意識し「心の山」としたのは、ボタと鉱滓（こうさい）と喧騒におおわれた鉱工業地帯のすぐ隣、福岡・大分県境に広がる英彦山だった。この山岳は修験道の聖地だった。が、古くから女性を拒まず、彼女はここを舞台に多くの秀句を残した。

紡いだ作品は没後、一冊の句集に編まれた。そこには川筋気質に代表された雄々しい筑豊、北九州のイメージとはまったく異なる空間が広がっている。併せて、男尊女卑と良妻賢母に縛られた戦前社会で五七五へ託した自己表現、人間解放の叫び声が、久女の求めた自由で平等な時代を生きているはずの私たちに「男女共同参画の社会とは、個人の尊重とは何か」と問いかけながら迫って来る。険しい俳句の道を攀（よ）じ登り続けた久女の足跡を小倉と英彦山、両地域を結んでいた小倉鉄道（後の国鉄添田線、ＪＲ日田彦山線）にたどってみた。

第一話　福聚寺の座禅石

久女は明治二十三（一八九〇）年、鹿児島市で生まれた。三女で本名は「久（ひさ）」。父親の赤堀廉蔵は当時、鹿児島県庁に在籍する「官吏」「官員様」、母親さよは華道教授だった。教育熱心な恵まれた家庭で幼少期を送り、父親の転勤で沖縄や台湾でも過ごした。東京女子高等師範学校付属お茶水高等女学校を卒業し、東京美術学校卒業の杉田宇内と明治四十二（一九〇九）年に結婚。宇内が旧制小倉中学校の美術教師に採用されたため、二人は新婚旅行のように旧小倉市へやって来た。

① 俳人杉田久女（北九州市立文学館提供）

若い夫婦は鳥町や京町で間借り生活し、明治四十四（一九一一）年、長女の昌子が生まれた。この年は後に「白蓮事件」で渦中に立たされる大正天皇の従妹、柳原燁子が「炭鉱王」の伊藤伝右衛門と再婚し、飯塚の大邸宅へ入っている。

大正三（一九一四）年、杉田一家は板櫃川河口に近い日明へ転居した。同五（一九一六）年、久女は二女を出産し、俳句とも出会う。手ほどきしたのは訪ねて来た次兄の赤堀忠雄（俳号・月蟾＝げっせん）だった。〈月蟾は俳句をたしなむ人であった。久子（原文のまま）から久女への変貌のきっかけをつくったのはこの兄である〉（澤地久枝著『試された女たち』）。

二年後、娘たちの教育環境を求めて一家は中心部に近い砂津川そばの堺町へ引っ越した。他方、俳誌『ホトトギス』に投稿を始めた高学歴の主婦はまたたくまに才能を開花させ、「女流」という冠詞が付く俳人として佳句を生み出していく。白蓮研究者の一人は「白蓮は短歌が、久女は俳句が、心の声を形にすることができる一番いい手段だった、と感じている。久女は良妻賢母であることに加えて、当時の社会を覆っていた息苦しさ、不自由さ、互いを窮屈にし合うような付き合いが苦手だったのでは」と語る。

花衣ぬぐやまつはる紐いろ〳〵
足袋つぐやノラともならず教師妻

俳句の愛好者で久女のこの二作品を知らない者はまずいない。自身の俳論「大正女流俳句の近代的特色」で、前の句を〈複雑な色彩美を耽美的に大胆に言い

放っている〉と解き、後の句を〈婦人問題や色々のテーマをもつ社会劇の縮図〉と説明し、近代的特色の一つと規定している〈思想生活の明暗二方面を描き出している〉とも述べている。

このころ、彼女がたびたび足を運んだのが足立山麓の広寿山福聚寺だった。〈海辺へゆくよりは大方もの静かな山とか、樹木の生ひ茂つた処とか〉（随筆「吾が趣味」）が好きで〈空や水や樹木と共に呼吸し自然の中に没頭する時の心地は何ともいへない〉（同）久女だった。

自宅そばの砂津川は江戸時代、小倉城の外堀としてつくられた人工河川である。名前の通り小さく短い「小砂橋」を渡って、右折すると旧「中津街道」へ出、宇佐町の「勅使台」（てしがだい＝都市化で地名消滅）で街道からなだらかな旧「参道」へ入り、八、九百メートル進むと黄檗宗の福聚寺門前に着いた。

ゆっくり歩いても三十分くらいで境内へ。当時の住職は漢詩をよくした林隆照で、久女は庫裏に立ち寄り、しばらく談笑しては「座禅石」と呼ばれたあたりの高木の林に入り、句作にふけっていた。開祖・即非が座禅を組んでいたと伝えられているこの巨石のかたまりは戦後、観光道路建設の際に祠堂の後方へ一部が移設された。

② 久女がしばしば訪ねた当時の広寿山福聚寺仏殿（A）と座禅石（B）（昭和３年ごろ撮影　北九州市立中央図書館所蔵）

平成二十九（二〇一七）年春になって、北九州市立中央図書館書庫で昭和三（一九二八）年に撮ったとみられるガラス乾板三十七枚が見つかった。乾板はフィルムが用いられる前に使われた撮影の感光材料である。デジタルデータ化すると全面劣化していた一枚を除いてすべて画像が鮮明によみがえり、このなかに座禅石が含まれていた。大きな石は大木に囲まれ、即非作の詩が刻まれていた。

山萩にふれつゝ来れば座禅石
木の実降る石に座れば雲去来

むかしの座禅石のたたずまいを写真で確認した地元の人たちは「久女が出かけていたのはこんな場所だったのか」「鬱蒼とした山中だったんですね。ようやく句の内容が理解できた」と語り合った。

石家へ嫁いだ長女昌子が作成した年譜によると、この時期、久女は俳句だけでなく随筆、論評など多方面で活躍しており、昭和三年十月には福聚寺で師と仰いでいた高浜虚子の「歓迎句会」も開かれている。

第二話　椿咲く地蔵の森

久女は四十一歳になる昭和六（一九三一）年春、郊外の通称「富野菊ケ丘」へ引っ越す。富野台地にはこのころ「菊ケ丘」と称した地名が四、五か所にあった。関門海峡沿いの「企救（きく）の長浜」「企救の高浜」を見渡せる高台地区になるばかりでなく、夏から秋は野菊（嫁菜草）の白い花がたくさん咲く土地だった。「そういう訳で、こんな新地名が生まれ、紛らわしいので大字名を付けて富野菊ケ丘とか大畠菊ケ丘と呼ぶようになった」と高齢者に教わった。

新しい借家は二世帯の入居する二階屋だった。現在はびっしりと戸建て住宅や集合住宅が立て込み、旧居跡は二、三年前、駐車場に変わった。久女は昭和七（一九三二）年に発表した随筆「落椿」で〈隣りの地蔵堂の山椿がいっぱい花をつけ出した〉と書き出しているけれども、かつての地域の様子はまったくうかがえない。

ただ『足立山麓文化資源基礎調査報告書』には〈いつの頃からか時代は定かでないが…立派な地蔵堂が建っていた。お堂の横には地蔵堂のお守りをする人も住んでいたそうである。地元の人は「富岡のお地蔵さん」と言って親しく信仰していた。お堂の周辺には、大きないちょうの木があり、遠くからの目印にもなった〉と辺りの様子が描かれていた。

文中の〈お守りをする人〉は久女の「落椿」には庵主として登場する。毎年八月二十四日には盛大に地蔵盆が行われ、付近の小字名は「地蔵の森」「地蔵畑」「地蔵の下」だった。足立山麓文化村編『足立山麓の史跡を探る』には〈地蔵堂の周辺を「地蔵の森」といい、椿が咲き乱れる静かなたたずまいだった〉と書かれている。久女はこの森がとても気に入っていたようだ。

谺して山ほととぎすほしいまゝ

昭和六〈一九三一〉年、東京日日、大阪毎日新聞共催の「日本新名勝俳句」山岳の部英彦山で金賞を得て、久女を一躍有名にした。選者は高浜虚子。久女はこう書いている。〈とつぜんに何とも言へぬ美しいひゞきをもつた大きな声が、木立のむかうの谷からきこえて来ました。それは単なる声といふよりも、英彦山そのもの、山の精の声でした〉（随筆『日本新名勝俳句入選句』）。ホトトギスの声に心洗われ霊気が乗り移ったかのよう。「ほしいまゝ」の文言は苦吟の末、生み出した。

富岡のお地蔵さんは小倉城築城の際、大石を運びきれず手打ちにされた「富岡某」という親方の霊を慰めるため安置された、と伝えられている。富野台地の村々は地蔵信仰が盛んだったが、戦後の相次ぐ宅地開発であちこちの地蔵堂は整理統合され、いま目につくのは一つのお堂に十数体ずつが並んだ二か所くらいだ。高齢者らが掃除をしたり花を供えたりしている。そして富岡のお地蔵さんは富野菊ケ丘のころと変わらないお顔で小倉北区山門町一〇―三〇、安全寺境内のお堂においでであった。

それにしても、久女はどうして中心部に近い堺町を離れたのか。その理由は何にも書かれていない。しかし昭和初期の富野菊ケ丘のたたずまいを知れば推測できるような気がする。久女にとって〈樹木の生ひ茂つた〉地蔵の森のそばの家は深く心を惹かれるものがあつたはずだ。しかも、当時の市内地図を広げると足立山や福聚寺へはさらに出かけやすく、足を運び始めていた添田町の英彦山へ参詣するには「これ以上はない」と言っても大げさではない好位置だった。

俳人として成熟のときを迎えていた久女は、明治中期生まれの知識人である。英彦山を震撼させた神仏分離の勅令や廃仏毀釈の嵐など歴史の節々にも詳しかったはずだ。それに霊峰、聖域として守られてきた奥深い自然、興味深い伝説、行事、民話、質素だが季節感に満ちた山村集落の暮らしもある。句材の宝庫のような英彦山へ足しげく通いたくて家を変わったのではないか、と思えるのである。

第三話　鉄路で英彦山へ

〈菊が丘は東に足立、霧が岳をひかえ、西北に玄界灘をのぞみ見て誠に風の激しいところ。見渡す玄界に白波のわきたつ日は、丘の家は二階の雨戸もあけられず、凄しい勢で海から、山から、風が吹きつける〉（随筆「落椿」）

久女の家は、関門海峡側からだと急傾斜面を二段上がったところにあった。海抜にすれば十四、五メートルだったが、遮るものがほとんどなかったころなので響灘の藍島、馬島、六連島、海峡の浜辺に延々と続く松原も、工場群も遠くまで見渡せて、不動産広告風に書けばすこぶる「眺望良好」だった。交通の便も悪くはなかった。幅二メートルほどの道を二、三分も下れば「九軌」（九州電気軌道のちの西鉄）の「電車道」（現在の国道三号線）で、軌道を横断したら、もう私鉄「小倉鉄道」東小倉駅へ降りる幅広いやや急な階段が続いていた。家からおしゃれな洋風の駅舎まで五分前後で着いた。

③　久女の菊ケ丘旧居と東小倉駅の位置（昭和28年小倉市街図から）

小倉鉄道の前身は「金辺（きべ）鉄道」という。田川地区の石炭を最短距離で小倉の港へ、そこから関西方面に出荷する目的で計画された運炭線である。明治三十（一八九七）年に着工したが、最大の難所とされていた金辺峠の隧道開削（小倉南区呼野と田川郡香春町を結ぶ）では両側から掘り進んだ貫通地点で誤差が生じたり、予想外の湧水や落盤に遭遇したりで何度も計画変更を余儀なくされた。日清戦争後の経済不況で資金調達にも行き詰まり、会社は解散する。

あとを引き継いだのが同三十九（一九〇六）年に発足した小倉鉄道株式会社である。当初の計画は高浜停車場（後に東小倉駅と改称）から上香春を経て嘉穂郡熊田村（現嘉麻市）筑豊鉄道下山田停留所までとなっていた。それが英彦山麓の上添田駅（現添田駅）に変更になったのは、大株主蔵内家の意向が働いたとされている。

④　小倉鉄道上添田駅と乗合自動車（昭和７年撮影　熊谷食堂提供）

蔵内家は鉱山経営で知られた資産家で、沿線の香春町から添田町にかけては蔵内次郎作、保房親子が経営する岩瀬、峰地、大峰の「三大炭坑」をはじめ多くのヤマが連なり、終点の上添田駅には近接して峰地本坑の広大な載炭設備があった。もっとも参詣者や観光客も見込んでいて、小倉鉄道編刊「小倉鐵道案内」は上添田駅について〈英彦山神社（＝現在は英彦山神宮）に参拝するものは此驛に下車するを最も便とす〉と強調している。

大正四（一九一五）年四月、小倉鉄道は全線開業にこぎつけた。このころ久女は日明に住んでいたが、俳人としての第一歩を踏み出す直前であり、新しい鉄路の出現が久女と英彦山を結び付けたとみていい。

第四話　麓からは乗合で

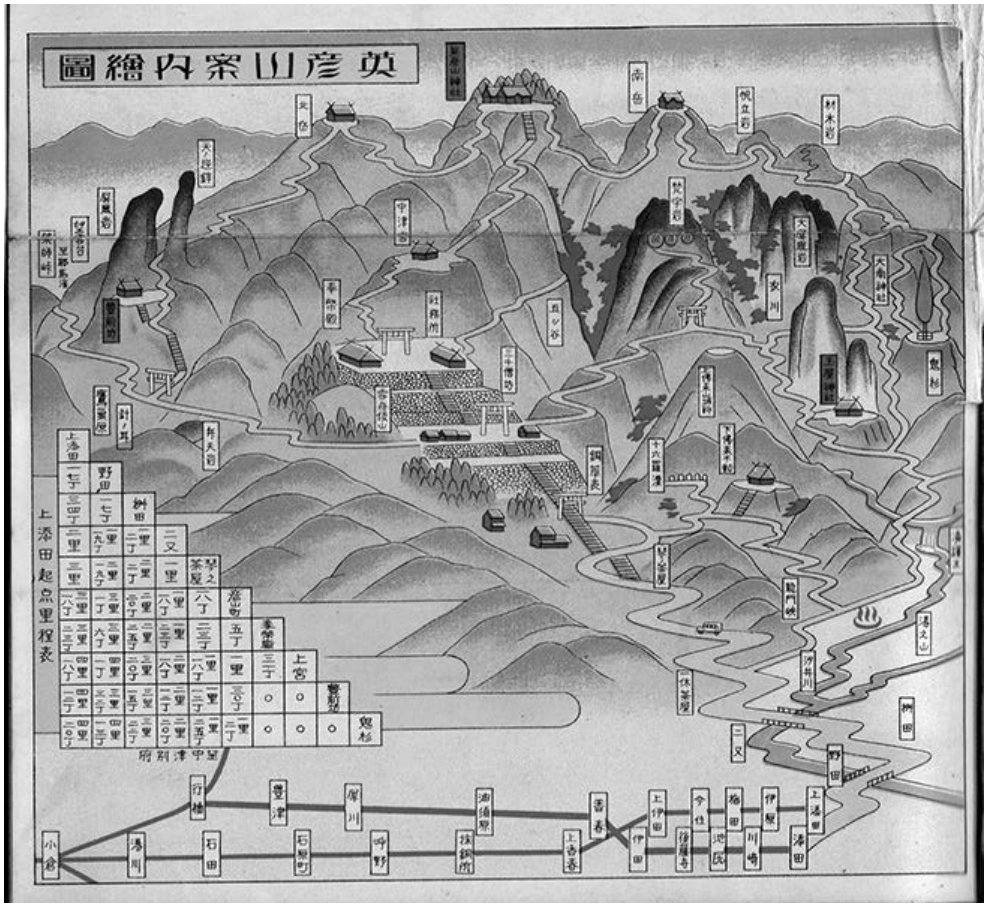
小倉鉄道がなかったころ、小倉の人々はどのようにして英彦山参りに出かけていたのか。江戸時代はもっぱら小倉城下から秋月街道を香春まで歩を進め、そこから日田道で添田へ向かい、登り口の桝田、さらに唐ヶ谷を通って中腹の銅鳥居へたどり着いていた。大半の登拝者は表参道の起点に当たる銅鳥居から下宮（奉幣殿）―中宮―上宮とお参りしていた。最短でも往復三日くらい必要だった。

明治も半ばを過ぎるころから北部九州は鉄道網の整備が急速に進み、人々は九州鉄道日豊線でいったん行橋へ出て、そこで田川線に乗り換え、旧添田駅（現西添田駅）から二股までは乗合馬車に揺られ、二股から約五二キロの山道を歩いて銅鳥居に達していた。片道だけでまだ半日以上かかっていた。

それが小倉鉄道によって日帰りも可能になった。日

英彦山　福岡・大分県境にある。標高一一九九メートル。古くから奈良県の大峰山、東北の羽黒山と並んで修験道の「三大霊山」とされてきた。修験道は〈民族伝統的な山の信仰に神道、仏教中の密教、中国の道教などが習合してつくりあげられた〉（木村晴彦著『香春・英彦山の歴史と民族』）。各地の山々は「女人入るべからず」とされてきたが、英彦山には女人禁制の定めが確認されず、山伏は妻帯し〈江戸時代の中ごろには女、子どもの山頂登拝が行われていた（一七六二年、塵壺集）〉（朝日新聞西部本社編『英彦山』）。

古名は「日子山」。詔や院宣で「彦山」「英彦山」と変わっていった。明治維新後の神仏分離令で「英彦山霊仙寺」を「英彦山神社」と改め、昭和五十（一九七五）年、神宮と改称した。霊仙寺講堂だった奉幣殿や表参道が始まる銅鳥居（かねのとりい）などは国指定重要文化財。動植物が豊かな一帯の山岳は耶馬日田英彦山国定公園に含まれている。



⑤　英彦山案内絵図（昭和７年発行『英彦山大観』から）

本旅行文化協会が出していた時間表によると、小倉鉄道の旅客列車は一日に上り下り各六本。東小倉午前六時四分の始発は終点の上添田へ八時九分に着いた。運賃は三等六十九銭（このころ米一升が四十二銭）。第二便の午前九時一分発でも十一時十五分着だった。

東小倉行の上りは上添田午後六時十分発、東小倉八時十三分着のあとにもう一本、深夜に東小倉へ到着する便があった。昭和五年十月号の時間表も上り下り各六本の運行で、発車時刻は全く一緒。運転時間も〈約二時間五分〉なので、着時刻も同じだったはずだ。

修験の霊山は、春は桜、夏は緑と涼、秋は紅葉、冬は雪遊び。四季を通して魅力に満ちていた。参拝者、観光客の増加で大正七（一九一八）年には早々と乗合自動車（フォードの幌型小型車六人乗り）が旧添田駅―銅鳥居間で不定期ながら運行を始めた。これによって女性でも東小倉駅から三時間足らずで銅鳥居まで行けるようになった。駅名も上添田から分かり易く「彦山口」に変わっている（彦山口から「添田」に再改称されたのは昭和十七年）。

久女は「お山」へ出かける時、何日かとどまることが多かったが、ここでは日帰りした、と思われる随筆「英彦山に登る」（発表誌年月未詳）の記述と当時の時間表を組み合わせて駆け足の参拝を想像してみたい。

橡（とち）の実のつぶて風や豊前坊

北東にある豊前坊・高住神社は修験道の霊地。天狗が棲むという伝説がある。岩の真下の本殿には天狗面が祀られており、前には高い橡の木（栃の木とも）がそびえている。コロンとした橡の実は直径で二、三センチ。小さい栗に似ていて、上手にあく抜きをすれば食用になり、むかしは常食する山村もあった。その実が落ちるときは、まるで「つぶて」「おろし」のようだという。この句も「日本新名勝俳句」で銀賞に選ばれた。神社境内に句碑が。

⑥　表参道の起点になっている銅鳥居

――晩秋。家事を終えた久女は東小倉駅を午前九時過ぎの二番列車に乗り、上添田駅前からは乗合自動車を利用し〈四十分余〉後に〈正午大鳥居〉前で降りた。ここから〈四十二丁〉（約四・六キロ）先が頂で〈奉幣殿の上からは奥深い樹海の道〉。午後二時ごろ上宮にたどり着いた。約二時間の登攀は標準的な所要時間である。句作にふけりたかっただろうが、この日はすぐ下山し午後三時に奉幣殿へ戻っている。そこから銅鳥居下へ移動し、再び乗合自動車で帰路につけば、八時過ぎには自宅近くの東小倉駅のホームに立っていたことになる。

慌ただしいものの小倉鉄道の開通で、英彦山は久女にとって遠い山というよりは、出かけやすい好きな山になっていったと言える。

第五話　暴風雨に遭遇

久女がいつから英彦山へ足しげく通い始めたのか、もう一つはっきりしない。ただ、昭和五（一九三〇）年九月には日刊紙「九州日報」に随筆「英彦山雑記」を寄せているので、堺町から富野菊ケ丘へ引っ越す前の昭和初期であることは間違いない。

この随筆では〈宝塚から遊びに来てゐる里の母〉と同年八月八日朝出かけ、現地の宿坊で先発した二女と合流している。数日間を過ごす準備をしての英彦山参りだった。ところが〈十一日夜から二日二夜は物凄いお山荒れでどしや降り。上の田からどつどと水が落ちてくるし、嵐は狂ふ筧はにごる。今にも石崖が崩れはしないか、家が倒れはしないかと、終日終夜びく〳〵もので暮してしまった〉〈英彦山では三十何年振の大暴風雨で、山下の橋は五つも落ちる。家は流れる。自動車は通ぜずなる有り様で閉口した〉という。

『山口県災異誌』や『気象要覧』によるとこの暴風雨は「台風番号三〇一二」（一九三〇年に発生した十二番目の台風の意）で、東シナ海から長崎県をかすめながら対馬海峡を抜けて北上した。奄美大島の名瀬で最低気圧九五四・九ヘクトパスカル（換算値）を観測し、台風の右半円に入った北部九州は全域で激しい風雨となり、下関で風速三九メートルを記録した。

福岡県下ではまだラジオ天気予報も始まっておらず、各地で家屋の倒壊や損壊、山がけ崩れ、床上下浸水、船舶の転覆といった被害が相次ぎ、小倉などで死

三山の高嶺づたひや紅葉狩

三山とは英彦山主峰の中岳、南岳、北岳をさす。三山全体が神格化され、謎多き神代の時代から霊山としてあがめられたという。縦走するにはかなりの体力を要するが、久女はともかく登り、歩いた。万葉集をはじめ古代の歴史に明るい久女は、興味をもって土地の人たちと触れ合った。お山の隆盛時は多数の坊舎が連なり、大勢の修験者や住民がいた。厳しい自然は、一筋縄ではいかないが、久女には凛として紅葉で染まる三山を空想できたのではないだろうか。

傷者が出た。英彦山から南南東、遥か遠くに見える久住山（標高一、七八六メートル）では福岡県の若者二人が遭難し、追悼碑そばで毎年八月、慰霊の「山の安全を祈るつどい」が催されている。添田町でも甚大な被害が発生したが、この台風に関する資料は地元でほとんど見当たらず、久女の随筆が貴重な体験記になっている。

翌六（一九三一）年、久女は百号を迎えた俳誌『葉桜』に「英彦山より」を寄稿している。その中には〈六回目の登山ですが最初の登山をのぞく外はいつも定つて一人でのぼります。途中鶯がいたるところないてます〉というくだりがある。「英彦山に登る」にも〈私は今年英彦山に五六度登つた〉〈いつも大抵一人で登る〉と書いている。つまり、久女は二か月に一度の割合で出かけていた計算になる。

滞在先としては旅館、宿坊のほか知り合った人の家に身を寄せている。少しでも節約したかったのだろう、地元には「苫屋を借りていたこともあった」という伝聞も残っている。

⑦　英彦山神宮の奉幣殿

第六話　攀じ登る女人

このころの書き物で目を引くのは昭和六年四月、俳誌『天の川』に発表した「攀ぢ登る道」である。〈登山といふ事には極く貧弱な経験しかもたない私が、はじめて豊前の或る山頂に佇んで、全九州の名山を一望の中にのぞみ見た時には、何ともいへず爽快な気にうたれた。たとへ四千尺でも絶頂には違ひない。俳句の道も同じ様なものではなからうか〉〈私たちは絶頂を志し、一歩々々よぢ登らねばならぬ。よし単なる仰望に終るとも。自分自身の力の及ぶ限り！私共はうち仰ぐ山岳なり太陽なりを大空にもちつゝよぢ登る事に、幸を覚える。四千尺をよぢたら更らに五千尺、六千尺と、限りなく俳句の高峰はそゝりたつ。婦人俳句の女流も、大いに元気を出して、どこ迄もよぢ登りませう〉と力説している。中途半端な甘えを許さない、俳句作家として立つ決意を表明したかのような言葉、文章が連なっている。四千尺は英彦山の標高で、句集の「英彦山雑吟」の項にも活力に満ちた作品が並んでいる。

よぢ登る上宮道のほとゝぎす
わが攀づる高嶺の花を家づとに
英彦山は高くはないが、山伏が験力法力を得ようと厳しい修業を重ねてきた険しい峰が連なっている。銅鳥居（標高五三〇メートル）まで仮にマイカーかバスを利用し、そこから徒歩で奉幣殿（同七一〇メートル）へ向かっても一気には上がれないほどきつい。大きな岩石で築かれた段々なので、すぐ息が切れてしまうのだ。この間には現在スロープカーが運行されている。

久女が〈樹海の中〉と表現した奉幣殿から上宮までは枝を握ったり、岩の出っ張りをつかんだり、くさり場も越えた。攀じ登らなければ山頂には着けなかった。しかも、彼女は腰を下ろして思索を深めるためか折り畳み式の腰掛「床机」（しょうぎ）を持ち上がっている。

北九州市と直方市の境に福智山（標高九〇一メートル）がある。ここも江戸時代は英彦山山伏の行場だった。前出の白蓮研究者は久女と同じ四十代に、この山に魅せられ毎週のように訪ねた。その経験から「久女は険しい山道も何かに突き動かされて、自分でもびっくりするくらい内なる力が現れるのを感じながら登っていたと思う。そして一歩一歩、俳句表現とは何か、自らに問い詰めていたのではなかろうか」と推測する。

第七話　足袋・草鞋・山袴

芋虫ときいて恋さむ蝶もあり

久女は父親の影響もあったのだろう、花や野菜を植え、夫が釣ってきた魚を料るなど、自然なものに癒しを見つけ、写生したり発句したりした。英彦山では「九大英彦山生物研究所」（宮司・高千穂宣麿男爵が寄贈）で、動植物の標本を興味深く見た。久女はよく蝶を詠んでいる。しかし、「恋さむ」とはどう解釈したら良いのだろうか。現実とのギャップか。宣麿の長男、俊麿の妻女・ユキヱは、久女から俳句を勧められ、峰女の俳号を持った。

よぢ下りる岩にさし出て濃躑躅

「よぢ登る」道ならぬ「よぢ下りる」躑躅（つつじ）とは。〈俳句の世界にも、人跡未踏の境地がありはしないだろうか？〉〈うち仰ぐ山岳なり太陽なりを大空にもちつゝよぢ登る事に、幸を覚える〉（随筆『攀じ登る道』）と宣言していた久女だ。成長のあかしか。よぢ下りるけれど岩間から上を見つめているよと、開き直っているのか。『花衣』五号廃刊、『ほとぎす』同人除名。険しい心情がしのばれるが、濃い躑躅が目に浮かび久女健在なりと思いたい。

久女はどんな格好で攀じ登ったのか。宿やその周囲では着物をきこなしていたが、登拝となるとそうはいかない。地元の十数人に意見を求めると、次のようなものだった。

まず、足元である。「戦前までは、男、女、参拝者、住民を問わず、山へ入るときは、みんな足袋（たび）に草鞋（わらじ）だった。足袋は長持ちするように夜なべしてついで、底を二重にしていた人が多かった。予備の草鞋を必ず腰に下げた」「その後、足袋の底にゴムを張り付けたものが出回ったが、やはり草鞋も履いた。足首にしっかり結わえられる草鞋は重宝した。丈夫な地下足袋や靴が出回るまでは草鞋が欠かせなかった」。

草鞋は藁（わら）などで編んだ伝統的な履き物だが、野良仕事用、一般用などと幾つか種類があり、山歩き用はかかとや親指部分に特別な工夫を施して簡単には弛まず、頑丈に作ってあって、丸一日履けたそうだ。ある食堂経営者は昭和二十五（一九五〇）年生まれ。実家が麓の駅と奉幣殿の中ほどで商店を営んでいて「自分が子どものころは、まだたくさん草鞋を売っていた」と語っていた。

『添田町史（下巻）』にも〈英彦山に通ずる旧道〉に面した〈野田の宮田家〉には「草鞋接待」と書かれた二メートルばかりの幟が伝わり〈毎年四月十四～十五日の英彦山神社の祭りの参詣者に対し、のぼりを立てわらじを下げて、無料で自由に利用させていたのである。これは、太平洋戦争後も続けられていた〉とあり、戦後もかなりの間、山間部では草鞋が使用されていたことが分かる。

衣類はどうだろ。上衣より下衣が問題になる。「上宮まで着物で登るなって無理。女性も動きやすいもんぺ風というか、袴（はかま）風というか、そんなズボン型の衣類だった。私たちは単に『もんぺ』と呼んでいた」という話ばかりだった。

「もんぺ」と聞いたら戦時下、国が推奨したため「銃後の女性の服装」のイメージが強いが、もともとは動きやすくて体が守られ保温性も優れた女性の作業着、仕事着を指し、全国各地の農山村にさまざまな呼び名で存在した。「もんぺ」の他に「やまばかま」「さんぱく」「ゆきばかま」「たちつけ」「かるさん」などがそうで、作り方も多様だった。昭和初期に全国調査をした草創期の民俗学者、宮本勢助はこれらを「山袴」と総称しようと提案している。「座敷袴」を意識してのことだった。

一方、大きな都市では明治維新後、「女袴」「女子袴」「絞り袴」が登場している。「女らしくない」と攻撃されて一度は消えたが、華族学校教師らが復活させ、明治三十年代には当時、最高学府とされていた東京女子高等師範学校が女袴を制服に採用した。久女はここの付属高等女学校で学んだので、ズボンのような衣類にも抵抗感はなかったはずだ。久女自身が「攀じ登り」に合った山袴を仕立て、背負子（しょいこ）を作って床机を括り付け、急峻な山道に挑んでいた、と考えてもおかしくはない。

ところで、英彦山では早くから女人登拝が行われていた。この点も久女をお山に引き付けた大きな理由に挙げられそうだ。しかし、女性が自由に暮らせた訳ではなく、長寿の女性は「昔は、出産は銅鳥居より下でする、という決まりがあって、おなごにはそれは負担だった」と話した。朝日新聞西部本社編『英彦山』は〈山中の出産は固く禁じられ、予定日の前には山を下り、産後四十九日間は帰れなかった。早産などの禁を犯すと、一週間の幽閉、科料（罰金）に処された〉と書いている。ひとりで滞在することが多かった久女がこんな句を詠んでいる。

花の戸にけふより男子禁制と掟て棲む

宿坊の入り口とか旅館のふすまに張り紙をした訳ではないのだろうが、句は花、男子禁制、掟、棲という漢字を選び並べて〈思想生活の明暗二方面〉を巧みに描き出している。女人禁制がなかった所でも女性が生きやすい時代とは程遠い状況が続いていたことを伝えつつ、この作品にも理不尽や禁忌、抑圧を嫌う久女の堅い意志が感じられる。

第八話　理由なき除名

『ホトトギス』編者の高浜虚子は近代俳句を指導した一人で、確かな選句眼の持ち主だった。文化勲章を受章している。五七五の形式と季題を重んじる俳人たちにとって『ホトトギス』は最高の舞台だった。昭和九（一九三四）年六月、その同人に久女は推挙された。「東の（長谷川）かな女、西の久女」と称され、〈虚子が女性の俳句作家を育てようとした時流の申し子〉（北九州市立文学館編『北九州の文学』）が高い頂に

⑧　奉幣殿下に立つ久女の「谺して」句碑

立った瞬間でもあった。

ただ同人の実態は、当時と今日では大きく異なり、「志を同じくする者が集うというよりは門人に加えてもらう感じだった」と振り返る人がいる。努力が認められて先生に入門を許される雰囲気だったらしい。毎日俳壇の選者を長年務めた岡本眸も昌子らと昭和六十二（一九八七）年秋に行った座談会で〈結社というのは主宰者天国みたいなところがありまして、主宰者がひとこと言うと小さなことでもだんだん大きくなって、意に反した人はまるで悪者とか逆賊といったような扱いをされてしまう。それが結社の一つのこわさだという気がしているんです〉（吉田ひとみ速記『杉田久女と橋本多佳子』）と述べている。

〈同人変更　従来の同人のうち、日野草城、吉岡禪寺洞、杉田久女三君を削除し、浅井啼魚、瀧本水鳴両君を加ふ　ホトトギス発行所〉（『女性俳句の光と影』）

杉田久女句集　久女自身が選び、残した作品集。長女の石昌子が墨書の遺稿を原稿用紙に清記し、「堺町」「花衣」「菊ケ丘」の三部に分け、昭和二十七（一九五二）年、角川書店から出版された。堺町、菊ケ丘はともに暮らしたところの地名。花衣は久女が主宰した俳誌名。計千四百一句が収められている。目立つのは英彦山を句材にした作品の多さである。花衣の部には「英彦（えひこ）山六句」が、菊ケ丘の部には「英彦山雑吟百十二句」が掲載されている。

平成二十（二〇〇八）年、北九州市立文学館が角川版を底本に文庫本サイズで復刻した。これによって多くの人が久女の作品を鑑賞できるようになった。句だけは旧仮名遣いを残している。有名な「足袋つぐやノラともならず教師妻」のノラは、角川版では久女が後日修正した「醜」になっているが、復刻版では元に戻っている。

軍事クーデター「二・二六事件」が起きた昭和十一（一九三六）年、『ホトトギス』十月号に、久女除名の社告が掲載された。虚子自身が「清艶高華」と高く評していた俳人を切り捨てたのだ。久女には青天の霹靂であり、昌子は母親の年譜で次のように書いている。

〈理由の公開も通達もなく突然の除籍であり…傾倒し畏敬してきた虚子より受けた処置として、致命的な衝撃だった〉〈終生虚子を師と仰ぎ、「ホトトギス」の作者として一貫する不動純粋な精神を尊しとしていた。しかし、「ホトトギス」から除名されたことは俳壇から抹殺されたに等しく、恥もかかされたという自意識も内向して、終生笑いを失った日が続いた〉

宇多喜代子は『女性俳句の光と影』の中で〈理由は何であれ、虚子を拠りどころにして二十年、ひたすら俳句をつくり続けてきた久女にとって、虚子からの義絶は俳句への命脈を絶たれたことと同じでした〉とつづっている。

このころ久女は体調が思わしくなかった。医師寺岡葵は病跡学に基づいて慢性甲状腺炎（橋本病）だったと診断し、〈久女の橋本病に決定的な打撃を与えたのは昭和一一年一〇月の『ホトトギス』除籍に違いない〉（『俳人杉田久女の病跡―つくられた伝説―』）と指摘している。

里の女と別れてさみし芽独活掘る

山里の春はかぐわしい。竹の子、わらび、ぜんまい…なかでも独活（うど）と山椒は英彦山ならではの食材。昭和六年、久女は「日本新名勝俳句」金賞受賞のお礼参りに奉幣殿を訪ねる。夕方に下山。途中で山独活掘りの女に会い，薄紅色の独活の根を袋から出してもらうと全部買った。昭和十二（一九三七）年ごろ出かけた英彦山では木の芽和え、胡麻豆腐などの山菜料理を食しているが、生き生きしていたころの山独活を思い出したのか。発句に力みがなくなっている。

失意の久女を招いたのはやはり英彦山だった。日中戦争が勃発した昭和十二（一九三七）年の七月、「門司新報」に新聞コラムとしては長い「英彦山の仏法僧」を寄せている。〈彦山真に秀彦なり。と山陽も讃へてゐる。四季によつて変化の多い、何度来ても面白い山で、風景の点からは満点〉としたためながら、俳句には一言も触れていない。随筆「攀じ登る道」だけでなく、自らが主宰した句誌『花衣』創刊の辞で〈久女よ。自らの足もとをただ一心に耕せ。茨の道を歩め。貧しくとも魂に宝玉をちりばめよ〉と誓っていた俳人の面影を探すのが難しい変わりようである。

坂本宮尾は著書『杉田久女』で〈昭和十四年に、波乱に満ちた俳句人生を総括して、それまでの句を全部書き出して自選した。中断期間を含めて二十三年ほどということになるが、この間に約二千句を残した〉と記している。

⑨　俳句を愛する人で埋まった第２回大会の会場（ひこさん花工房で・大池青湖さん提供＞

第九話　よみがえる久女

久女は俳壇を去った。北九州の旧五市は下関要塞地帯に含まれていたばかりでなく、製鉄から兵器の生産までを担う軍需産業の一大拠点だった。満州事変以後は他都市より早く戦時体制に突入し、市民生活は軍国主義に塗り込められていった。太平洋戦争に突入すると、各家庭の若者だけでなく中年男性にも赤紙（召集令状）、白紙（徴用令状）が続々と舞い込みだした。旧制中学生、女学校生は軍需工場へ動員された。新しい俳句の創造を目指していた「新興俳句」の作家たちが治安維持法違反容疑で特別高等警察（特高）に逮捕された。いわゆる「俳句事件」「京大俳句事件」で、弾圧は俳人にも及んでいた。

戦況の悪化とともに旧五市は昭和十九（一九四四）年六月から繰り返し激しい空襲に見舞われ、久女も〈警報が鳴ると、句稿や原稿などの風呂敷包みを抱えて防空壕に独り入り、宇内は学校の警備に出かけるという毎日であった〉（年譜）。すでにあきらめの境地にあった久女の願いは死後でもいいので句集を出して欲しいというものだった。戦禍と封建遺制に覆われた社会、病魔が久女の心身を蝕み続け、昭和二十一（一九四六）年一月二十一日、天才的な俳人は死去した。五十五歳だった。

没後のことである。久女はしばしば人格を傷つけられた。プライバシーを侵害され、名誉棄損や風説の流布の罪が成立しかねない事態も生じ、評価をゆがめられたり、妨げられたりした。だが、遺族をはじめ地域の研究者、小出版社、文学者、小説家らの地道な取材や研究、女性学の発展、ジェンダー（社会的文化的につくられる性差）平等を実現しようとする新たなうねりのなかで、久女の生き方、作品は改めて見直され輝きを取り戻していった。

〈彼女は一九世紀に生まれた女性なのであった。因習がつよくのこり、権威は絶対のものであり、そして女のおかれる地位はきわめて低い。そういう時代の制約のなかで、ひたむきに生きようとし、答えをつかむ日に出会わずに終わった人生である〉（『試された女』）という澤地の一節は、今後も疎かにはできない久女の生涯をたどっていく「視座」ではあるまいか。

第十話　「心の山」と句会

〈英彦山に久女が親しんだのは一年や二年ではなく、終生久女の心の山であった。日常心の苦しい時、誰にも打ちあけられない悩みごとなど神前に額づいたことなど、その句を見ただけでも私には偲ばれるのである〉（石昌子著『久女無憂華』）。最初の句碑が昌子らによって昭和四十（一九六五）年、奉幣殿近くに建った。刻まれた作品はもちろん「谺して」だった。同四十四（一九六九）年には「橡の実の」が豊前坊の高住神社境内に建立された。

小倉にも昭和五十四（一九七九）年になると、久女が足しげく通っていた福聚寺の隣の末寺圓通寺境内に「三山の」、昭和五十九（一九八四）年には堺町の公園に「花衣」の句碑が整えられた。「無憂華」の碑も加わった圓通寺では平成九（一九九七）年から毎年、命日に市民らがつどい、「久女忌」が営まれている。

平成二十八（二〇一六）年からは毎年五月に「『山ほととぎす』杉田久女英彦山俳句大会」が中腹の「ひこさん花工房」で開かれている。添田町活性化推進協議会主催。第二回であれば、応募句には各地の百七十二人が四百六十六句を、当日来場した百二人は二百三句を寄せた。会場には久女の孫、石太郎の姿もあったと聞いた。そして次の二作品が天賞に選ばれた。「広報そえだ」から転載する。

荒磴の天に伸び行く比古太郎　　東泰（北九州市）

戦争を知らずに古希や青き踏む　　石松昌子（遠賀町）

東の「荒磴」は荒々しい石畳や石段の意であろう。「比古太郎」は英彦山に由来する入道雲の異称。気持ちのいい雄大な作品だ。石松の句を目にしたとき「この方は久女が亡くなった年にお生まれになったのでは」と思った。「青き踏む」に、平和な日々が続くことを願って新たな一歩を踏み出した人の誠実な生き方が伝わって来た。

地元の俳人高千穂峰女（本名・ユキヱ）は、久女とは五歳違いの明治二十八（一八九五）年に生を受け、昭和六十二（一九八七）年に没した。昭和五（一九三〇）年、英彦山で催された句会で久女に出会って俳句の道を進み、句集『日子のかげ』『磐境』『祀り』で注目された。その峰女が句碑を詠んだ三作品を『花散るばかり』から紹介して、私たちの久女報告を終わりたい。

ほとゝぎす谺をまとひ久女の碑

碑にこもる女の一途ほとゝぎす

ほとゝぎす雲截る中や久女句碑

＝文中敬称略＝

【注】別掲の久女の作品は「英彦山六句」「英彦山雑吟」から。解説は宮嶋玲子

主な参考文献

【作品集】

杉田久女全集（全2巻）　立風書房　一九八九年八月

杉田久女随筆集　講談社文芸文庫　二〇〇三年六月

杉田久女句集　北九州市立文学館　二〇〇八年一月

杉田久女頌　北九州市立文学館

【評伝・評論】

杉田久女ノート　増田連　裏山書房　一九七八年四月
花衣ぬぐやまつわる　田辺聖子　集英社　一九八七年二月
花散るばかり　高千穂峰女　葦書房　一九八八年三月
杉田久女と橋本多佳子　山田勝彦編　牧羊社　一九八八年九月
久女無憂華　石昌子　東門書屋　一八九三年一二月
試された女たち　澤地久枝　講談社文庫　一九九五年一〇月
大正の俳人たち　松井利彦　富士見書房　一九九六年一二月
俳人杉田久女の世界　湯本明子　本阿弥書房　一九九九年九月
杉田久女　坂本宮尾　富士見書房　二〇〇三年五月
俳人杉田久女の病跡　寺岡葵　熊本出版文化会館　二〇〇五年四月
大正の花形俳人　小島健　ウエッブ　二〇〇六年八月
女性俳句の光と影　宇多紀代子　ＮＨＫ出版　二〇〇八年七月
久女〈探索〉　増田連　櫻の森通信社　二〇一四年一二月
北九州の文学　北九州市立文学館　二〇一七年二月

【添田町・英彦山・小倉関係】

英彦山　読売新聞西部本社編　赤間関書房　一九七五年九月
英彦山　朝日新聞西部本社編　葦書房　一九八二年一〇月
英彦山を探る　添田町役場編　葦書房　一九八六年六月
町制施行77周年記念史　添田町郷土史会　添田町　二〇一七年一月
香春・英彦山の歴史と民俗　木村晴彦　葦書房　一九八八年九月
添田町史（下巻）　添田町史編纂委員会　添田町　一九九八年六月
足立山麓文化資源基礎調査報告書　北九州市　一九九二年三月
足立山麓の史跡を歩く　足立山麓文化村編　せいうん　一九九六年三月

【その他】

山口県災異記　山口県知事公室編　山口県　二〇〇四年三月
調査報告書　宮本勢助「山袴全国方言調査紙（昭和九年）」　加藤幸治編　一九五三年三月　二〇一二年三月